

天平四年遣西海道節度使歌の考察

―帰還の春をめぐって―

稲見 知華

論文要旨

当該歌は天平四年に西海道節度使として派遣される藤原宇合を送る、高橋虫麻呂の歌である。本稿では長歌の季節表現に焦点を当て当該歌の機能を考察する。

節度使は任期不明の臨時の官職だが虫麻呂は帰還の時期を春に据える。これは漢詩文に類似した発想を用い女の盛時に帰還を願う様を表すための工夫で、女を虫麻呂自身転換させ奉迎に繋げる。

歌中に複数表れる季節表現は、古代中国の帝が季節を建て定めることが政の重要事とされ、季節の順行が政の成功を表す発

想に重ねられ、天皇の代行者たる存在として描かれる宇合への讃美となる。末尾の「春さり行かば」は歌い手の現在から見た時間の進行方向を明瞭にし、出立の時期から帰還の未来までを照射する表現であり、待つ側の虫麻呂と旅立つ宇合との時間の継続を強調し、両者の一連の時間を顕在化させる。

当該歌は宇合への称賛壮行を目的とし、季節表現により、虫麻呂と宇合との紐帯を表す。

【キーワード】

西海道節度使 藤原宇合 高橋虫麻呂 季節 時間

はじめに

四年壬申、藤原宇合卿、西海道の節度使に遣はさるる時に、高橋連虫麻呂が作る歌一首并せて短歌

白雲の 竜田の山の 露霜に 色付く時に うち越えて 旅行く君は 五百重山 い行きさくみ 賊守る 筑紫に至り 山の

そき 野のそき見よと 伴の部を 班ち遣はし 山彦の 応へむ極み たにぐくの さ渡る極み 国状を 見したまひて 冬ごも
り 春さり行かば 飛ぶ鳥の 早く来まさね 竜田道の 岡辺の道に 丹つつじの にははむ時の 桜花 咲きなむ時に やまた
づの 迎へ参る出む 君が来まさば

(6—九七一)

反歌一首

千万の 軍なりとも 言挙げせず 取りて来ぬべき 士と思ふ

(6—九七二)

右、補任の文を検すに、八月十七日に東山・山陰・西海の節度使を任ず。⁽¹⁾

右は、天平四年に藤原宇合の西海道節度使派遣に際しての高橋虫麻呂の歌である。左注より、西海道節度使のほか東山道・山陰道の節度使の任命があつたことが知られる。当該歌の直後には節度使に向けた天皇御製歌も掲げられ、節度使派遣に際して大掛かりな送別場が設定されたと想定される。⁽²⁾ 当該歌には反歌が付されるが、反歌では「賊守る 筑紫」にあつて、宇合は相手が「千万の 軍なりとも」討ち取ることができると述べて、歌の趣を異にする。節度使派遣に際しての壮行を目的としたものであるなら、反歌のように力強い壮行の色合いを表して良いと思われるが、長歌では冒頭と末尾付近に対となる季節の表現を配置し、春の帰還の時期に句を多く割きながら「迎へ参る出む 君が来まさば」と歌い収める。

当該歌は季節表現を冒頭と末尾に据えており、一見すると文飾表現のようである。節度使送別に際して単にその場を盛り上げるための華麗な技巧表現として用いるのであれば、春を始発として季節の循環を表しても良からう。また春の景に句を割き、帰還を待望する姿勢を描くなら冒頭の出發の景は不要ではないか。しかし、公的な任務を負って遠方へ派遣される使節を見送るのに出發と帰還の時期を殊に意識して歌い込む必要があつたと考えれば、季節の表現は歌の技巧に留まるものではなくなる。「露霜の色づく時に」に歌い始め、春に帰結させる当該歌の構造は注目に値しよう。

以上、本稿では長歌に見える季節表現を虫麻呂の創意による表現上の特殊な歌いぶりと捉えて焦点化し、帰還の時期を春に据える意

図に加え、壮行歌としていかに機能していたかを検討する。

一、送別歌の類型

送別の場合において季節表現を凝らした歌が歌われることは普遍的なものであるか、他の送別に際しての歌と比較して当該歌の特徴を探っていく。

公務を負った者の出発に際しての歌として天平五年の入唐使に贈る歌があげられる。作歌年代は当該歌より一年下るが、状況は当該歌に近いものと言える。

①神代より 言ひ伝て来らく そらみつ 大和の国は 皇神の 厳しき国 言霊の 幸はふ国と 語り継ぎ 言ひ継がひけり 今の世の 人もことごと 目の前に 見たり知りたり 人さには 満ちてはあれども 高光る 日の大朝廷 神ながら 愛での盛りに 天の下 奏したまひし 家の子と 選ひたまひて 勅旨（反して、大命と云ふ） 戴き持ちて 唐の 遠き境に 遣はされ 罷りいませ 海原の 辺にも沖にも 神留まり うしはきいます 諸の 大御神たち 船舳に（反して、ふなのへにと云ふ） 導きまをし 天地の 大御神たち 大和の 大国御魂 ひさかたの 天のみ空ゆ 天翔り 見渡したまひ 事終はり 歸らむ日には、 また更に 大御神たち 船舳に 御手うち掛けて 墨繩を 延へたるごとく あちかをし 値嘉の崎より 大伴の 三津の浜辺に 直泊てに 御船は泊てむ つつみなく 幸くいまして はや歸りませ

②大伴の 三津の松原 掻き掃きて 我立ち待たむ はや歸りませ

③難波津に 御船泊てぬと 聞こえ来ば 紐解き放けて 立ち走りせむ

④玉だすき かけぬ時なく 息の緒に 我が思ふ君は うつせみの 世の人なれば 大君の 命恐み 夕されば 鶴が妻呼ぶ 難波潟 三津の崎より 大船に ま梶しじ貫き 白波の 高き荒海を 島伝ひ い別れ行かば 留まれる 我は幣引き 斎ひつつ

（5—八九六） 山上憶良

（5—八九六） 山上憶良

（5—八九四） 山上憶良

①は好去好来歌である。左注には「天平五年三月一日に、良の宅にして対面し、献るは三日なり。」とあり、前回遣唐使として渡海した憶良が、今回の遣唐大使である多治比真人広成と対面し、歌を献上する。⁽³⁾政務を終えて帰朝する日には、船は寄り道せず三津の浜に着くだろうと、使節が恙なく帰還することを祈る。②も長歌に加え、出発の地にして帰着の地である三津の松原を掃き清めて帰還を待ち望むと繰り返す。③は船の音が聞こえたら衣服を整える暇も惜しんで急いで迎えようと逸る気持ちを歌う。④は大君の命を負って旅立つ様を見送る歌い手が、幣を引き物忌みをして齋戒しながら早期の帰還を祈念する。右にあげた歌はいずれも見送る側の立場から旅の安全無事を願い、一刻も早い帰還を「はや帰りませ」「はや帰りませ」と類型的に表す。⁽⁴⁾これら送別に際しての歌を概観すれば、任を受けたことへの称賛、唐への遠い旅程、帰還への願いに主眼が置かれるとわかる。①「帰らむ日には」③「聞こえ来ば」「立ち走りせむ」と将来の景を歌う箇所が見え、帰還への期待感が表れ、また齋戒して帰還を待ち続ける様を表すことで残る者に焦点が当てられるものの、季節に関する語句やその要素は表現上含まれない。

当該歌では、帰還に重点を置いて歌うこと、「はや帰りませ」といった帰還を待ち望む詞章を含むことは見送る側が歌う送別歌の類型⁽⁵⁾から外れないが、季節を提示し時間の流れを描き出すことは他に見えない表現方法であることが確認でき、虫麻呂独自の表現の工夫と言えよう。

以上季節表現を含む送別歌は虫麻呂に特徴的なものであると考えられるが、左注に「八月十七日に東山・山陰・西海の節度使を任ず。」とあり、明確に暦日が表されている。そうすると、実際の宇合の任官の時期に即して冒頭の季節が据えられたと推測できる。ただ秋の出発から春の帰還では一年経たずの帰還となり、帰還の時期を春と定めることには留意すべきだろう。

二、宇合の派遣

冒頭の西海道への出発の時期は「露霜の色づく時」であり、左注に示された節度使の任命時期による。では末尾の帰還の春も節度使の職務規定によるものか。宇合の節度使関連の記事を『続日本紀』に見ていく。

1 正三位藤原朝臣房前を東海・東山二道節度使とす。従三位多治比真人県守を山陰道節度使。従三位藤原朝臣宇合を西海道の節度使。道別に判官四人、主典四人、医師一人、陰陽師一人。

(天平四年八月十七日条)

2 諸道の節度使の請に依りて、駅鈴各二口を充つ。

(天平四年九月二十七日条)

3 節度使に白銅の印を給ふ。道別に一面。

(天平四年十月十一日条)

4 諸道の節度使の事、既に訖りぬ。是に、国司主典已上をしてその事を掌り知らしむ。

(天平六年四月二十一日条)

宇合が西海道の節度使として任じられたのが1である。2が駅馬利用の資格を証明するための駅鈴の給付が節度使から請求されたとする記事、3が白銅の印章を授ける記事であり、印章を授かって出発したものと思われる。そのため実際は任命から出発まで二か月ほど期間を空けることになる。4には節度使の任務が終了したことが記され、国司主典已上以上に終了を承知させたところから、実際の宇合の帰還は四月以降のこととなったと推測できる。この他、『懷風藻』にも国内を東奔西走する様を嘆く、辺塞詩を踏まえたであろう作が残る。西海道節度使についての記事は天平四年に派遣されたものの他、節度使派遣が『続日本紀』天平宝字五年十一月十七日条にも見えるが、天平宝字七年八月十八日条に廃止とある。このように二度の派遣で廃止されるため実態は判然としないところが多い。

そもそも節度使は令外官であり、唐の制度をもとにする。大原良通氏の論に導かれながら節度使将来について確認すると、養老元年

に出発した第八次遣唐使は翌二年年に帰朝しており、その後、日本で初めて節度使が置かれる天平四年次までに遣唐使の派遣がないことから、第八次遣唐使がもたらした官職であるとされる。靈龜二年八月二十日条の『続日本紀』記事には第八次遣唐使任命がある。

是の日、従四位下多治比真人県守を遣唐押使とす。従五位上安倍朝臣安麻呂を大使。正六位下藤原朝臣馬養を副使。大判官一人、少判官二人、大録事二人、少録事二人。

当時正六位下の官位にあった宇合が副使とされる。ここから宇合自身が唐に渡り、節度使をはじめとした諸制度を学んでいたと想定できる。遡って靈龜元年五月十四日条の詔には日本に節度使が置かれることとなった理由が記される。

また、五兵の用は古より尚し。強きを服し柔きを懷くこと、咸く武徳に因る。今、六道の諸国、器仗を營造すること、甚だ牢固からず。事に臨みて何ぞ用ゐむ。

国内の平定は武徳によって行われるものであるのに、今の六道の諸国は軍事力が不足していると述べる。以下諸国を視察するための按察使を派遣するように計画せよと続き、こうした軍事力の充足を図るために按察使や節度使が日本でも取り入れられたという。軍事拡充を目して導入された節度使の実際の職務は、『続日本紀』天平四年八月二十二日条に詳しい。

東海・東山二道と山陰道等との国の兵器・牛馬は、並びに他処に売り与ふこと得じ。一切禁め断ちて、界を出さしむること勿れ。其れ、常に公に進る牧に繋ぎ飼ふ牛馬は、禁の限に在らず。但し、西海道は恒の法に依れ。また、節度使の管れる諸国の軍団の幕・釜欠くこと有らば、今年の京に入るべき官物を割き取りて価に充て、速かに填て備へしめよ。また四道の兵士は、令に依りて差し点し、四分が一を満てよ。その兵器は、旧き物を修理へ。仍百石已上を載するに勝ふ船を造れ。また、便宜を量りて糧を造り塩

を焼け。また筑紫の兵士は課役並に免す。その白丁は調を免し庸を輸さしむ。年の限の遠近は勅の処分を聴け。

牛馬の売買や、幕張や釜、船などについて軍団の設備補充や課役の減免についての軍事力の拡充のために設備を補填について勅により定められていることから、「敵守る筑紫」や反歌の「千万の軍」は節度使の職務への敬意を虫麻呂がやや大仰に表したものであり、西海道節度使は敵対する者を武力を行使して平定しに行くというよりも、軍事力拡充や規定を設定するための派遣であったものと思われる。

さて当該歌の季節表現は節度使の任期と関連するとも考えられるが、任期について大原氏は「按察使も節度使も、もともと臨時に任命され、任務が終われば廃止される使職であり、その権限によって臨機応変に多くの事柄に対処できるという特長を持っている」と述べる。そのため異なる制度の中でも組み込むことが容易になるといえる。⁽⁶⁾『続日本紀』には節度使の詳細な任期を記さない。恐らくは任務が遂げられれば役割も終了して帰路に就くのだろう。筑紫に向かうことは確かであるから、すぐに帰京できないことは容易に理解され、かつ初めて導入された役職であることも加味すれば、虫麻呂も宇合の節度使任命の決定時あるいは出立の時点ではなおさら任務の終了時期までは予想し得なかっただろう。⁽⁷⁾予め帰還の時期がわかつているならば、規定の事実をもとに歌うことも当然だが、令外官である節度使では帰還の時期は推測しがたく、春に帰還するという保証はない。それにも関わらず虫麻呂は、宇合を「露霜の色づく時」に出発し、「冬ごもり春さり来れば」帰還するとして一年を経ずに帰京するかのように歌う。未定であるなら他の送別歌のように「はや帰りませ」や当該歌の「早く来ませね」と表すだけで事足りるのではないか。すると、宇合の帰還を春に据えることは虫麻呂の空想となろう。一年を経ずに再び竜田山に姿を現したならばと仮定して歌うのは、ほぼ確定的な演出による歌いぶりというより、むしろ「早く来ませね」に重ねて表現される、宇合の早期の帰還を願う意識の現れであろう。あたかも予め決まっていたかのように出発の段階で帰還の様相を歌うことに虫麻呂の送別歌としての意図がある。

三、帰還の春

当該歌では晩秋の出発から冬を経て春と一連の時間が描き出され、表現上は竜田道の春に花咲きにほふ、春に連想される景が連ねられる。前節で確認したように、宇合の帰還の時期は定められていない。出発の「露霜の色づく時」の時期設定は事実を踏まえて取り込まれているのに対し、春の帰還はこうした外的な要因によるものではない。ここからは歌中最も句を割く春の描写と帰還を春に設定したことの意味を、踏襲される表現との関連から検討する。

西地貴子氏は、都から筑紫へ派遣される辺境防備の軍士としての宇合に対して「丹つつじの 薫はむ時の 桜花 咲きなむ時」と花咲く頃の帰還を願う虫麻呂には待つ女の姿が重ねられると述べる。辺境防備の軍士を見送る女の嘆きを表す辺塞・閨怨詩の要素を含み、更にそれを明らかにさせようと歌の末尾に磐姫皇后や軽太郎女の詠である、

君が行き 日長くなりぬ 山尋ね 迎へか行かむ 待ちにか待たむ
君が行き 日長くなりぬ やまたづの 迎へを行かむ 待つには待たじ

(2―八五) 磐姫皇后
(2―九〇) 軽太郎女

右の二首を想起させるために「山たづの 迎へ参る出む」と重ねたと指摘する⁽⁸⁾。

当該歌が先行する歌や他散文作品の詞章を取り込むことは既に指摘されるところであり、イメージを重層化させようとした意識がある。西地氏の指摘のように、漢詩文に発想を得て旅立つ側と見送る側との立場を歌いあげるのだが、待つ女を装う姿は春の季節性とも関わりが見出せる。

当該歌に現れる「つつじ」と「桜」の取り合わせは「つつじ花 にほえ娘子 桜花 栄え娘子」と表される問答歌(13―三三〇五、三三〇九)と一致する。「にほふ」と「栄ゆ」により花の盛時を娘子の若い盛りの時期に重ねて比喩としたものが先に表現として成立していることから、当該歌も先行歌のイメージを引き継ぐものと考えられる。こうして花と容色を結び付ける例は複数確認できる。

⑤ 日下江の 入江の蓮 花蓮 身の盛り人 羨しきろかも

〔古事記〕下巻、雄略天皇、九四番歌謡^⑨

⑥ …天地の 神を乞ひ禱み いかにあらむ 年月日にか つつじ花 にほへる君が にほ鳥の なづさひ来むと 立ちて居て 待ちけむ人は…

〔万葉集〕3—443 大伴三中

⑦ …たまきはる 命も捨てて 争ひに 妻問ひしける 処女らが 聞けば悲しき 春花の にほえ榮えて 秋の葉の にほひに照れる あたらしき 身の盛りすら…

〔万葉集〕19—421 大伴家持

⑤は婚姻の約束をしたにも関わらず忘れられた赤猪子が雄略天皇と歌を交わす場面で、赤猪子は年老いて天皇と交わりを成すことができないことから花蓮のように身が若く盛りである人を羨む。⑥は自死した丈部竜麻呂を悼む歌で、「つつじ花 にほへる君が」と紅顔の青年であったことを想い出す。⑦は一人の女と二人の男との恋愛関係を歌う処女墓の歌に追同する歌で、女の身の盛りを「春花の にほえ榮えて 秋の葉の にほひに照れる」と表す。花の盛りを身の盛りに例える例では、⑥は青年の比喻だが「つつじ」が見え、⑦に「春花」が見えることから当該歌の「つつじ」と「桜」も身の盛りの時期を表すために引き合いに出されたものと捉えられるだろう。

漢詩文でも春の榮えの時期を女の容色に例えることがあり、『玉台新詠』の閨怨詩に例を見ることができる。なお小島憲之氏は、虫麻呂は伝説歌を歌う中で「中国的な表現の型を追」い、「中国的な表現の借用応用」を往々に行うと述べており、「菟原處女墓」（9—1809—1810）にも中国的な表現が見られ、反歌の結び（1811）に『玉台新詠』の詩句と類想のものがあげられるとする。これを踏まえれば当該歌を作歌するに当たっても念頭に置かれたか、参照された可能性は高い^⑩。

A 汀洲採白蘋 日落江南春 洞庭有帰客 瀟湘逢故人 故人何不返 春華復応晚 不道新知樂 且言行路遠

〔玉台新詠〕卷五「江南曲」柳惲^⑪

B 東飛伯勞西飛燕 黄姑織女時相見 誰家女兒對門居 開華発色照里閭 南窗北牖挂明光 羅幃綺帳脂粉香 女兒年歳十五六 窈

宛無雙顏如玉 三春已暮花從風 空留可憐誰與同

〔玉台新詠〕卷九「歌辭二首」

Aは旅人が夫に出会ったと言うので、女が自分の夫の帰らない理由を問う。旅人は、夫には他に女がいるわけではなく、道のりが遠いから帰れないと言っていると伝える。行路の遠さが帰りの遅いことの要因だが新しい愛人の有無を伝えることから、待つ女が言った「春が暮れる」というのは季節そのものが推移し、長い時間待たされる時間経過をいうほか、待つ間に容色が衰えてしまうことへの危惧であり、夫の愛情を失いかねないことを含意する。Bは若く美しい女が男に嫁がずにいることに対し、盛りの時期を誰と過ごすのかと歌う。女の容色を花に重ね、花が盛りである春の時期を超えると花が散るように容色も衰えてしまうという、相手のいない女を歌う例は散見され、当該歌が踏襲した問答もこうした発想を持つものである。

通常一定期間が経過すれば旅立った者は任を終えて帰還し、もとの場所で家族と生活を共にすることになるが、季節が巡っても帰還しない場合待つ側の苦悩の要因となる。春になっても夫が帰還しないことを嘆く詩には以下があげられる。

C 四時如湍水 飛奔競廻復 夜鳥響嚶嚶 朝照煜煜 厭見花成子 多看筍爲竹 萬里斷音書 十載異棲宿 積愁落芳髮 長啼壞美
目 君去在榆關 妾留住函谷 唯對昔耶房 如見蜘蛛屋 獨與響相酬 還將影自逐 象牀易檀簾 羅衣變單複 幾度過風霜 猶
能保莞獨

〔玉台新詠〕卷六「春怨」王僧孺

D 王關信使斷 借問不相語 春光太無意 窺窗來見參 久與光音絕 忽值日東南 柳枝皆颺燕 桑葉復催蠶 物色頓如此 嬌居自
不堪

〔玉台新詠〕卷八「春閨怨」吳孜

Cは榆關に行った夫に対し、妻は函谷に住んでいて容易には会えず、春になっても夫の帰還しないことを嘆く。Dでは夫のいる玉門関からの音信が絶えてしまったまま春になり、独り一日を暮らすやりきれなさを訴える。ここに女に仮託して夫と離れた状態にある嘆

きを歌うことが確認され、西地氏の指摘のように、虫麻呂も辺塞、閨怨詩の要素を踏まえ、待つ女の立場を暗示したのであろう。春のつつじや桜は女の容色を例えたもので、待つ側の虫麻呂が女に成り代わって宇合の春の帰還を歌い、待っている間に容色が衰えて愛情が失われることを危惧する女の姿を浮かび上がらせる。

虫麻呂は宇合との再会を春の竜田道に設定し、花の盛りのなか宇合を迎えようと歌う。春の花々は先行歌を連想させ、女の容色の変化とそれに伴う痛切な心情を暗示させる。将来の春を詳細に描写するのは、先行する歌や漢詩文に発想を求め、辺塞、閨怨詩に類似した発想を組み込むことで、見送る側の再会を待ち望む姿を描き出すためであると考えられる。漢詩文的発想を理解し合えるのは教養を有する者同士に限られ、重層化された表現から虫麻呂の意図を見出すことができた者はより強く両者の結びつきを実感し合う。宇合は漢詩にも明るく、当然趣旨を理解したことだろう。ゆえに虫麻呂の意図は伝達されたはずである。

四、季節の順行

宇合の出発と帰着の時期は歌中に「露霜の色づく時」と「冬ごもり春」と表される。この季節表現について、『全註釈』は「対句を多く使用して、整然と事を叙して」おり、「極めて美しい対照」をなすもので、虫麻呂の「独特の表現」と指摘する。⁽¹²⁾『全注』では、「黄葉に色づく出発」に緊張の色、「丹つつじと桜花さきにはふ春に喜びの予祝の情」を表わし、全体の構成に無駄がなく要点を押さえた表現として評価し、作者の力量が成せるものであると述べる。⁽¹³⁾これらは季節の対を文飾上の技巧の一つだと捉え、歌人虫麻呂への評価に集結させる指摘に留まる。ここから更に進んだ解釈を行った『釋注』は、秋春の対比は現在と将来との時間の対応であり、「歌上の趣向」によりって秋に対する春が持ち出されたと述べ、季節の対比に時間の進行を見出す。そして春の栄えの描写を宇合の行く先を予祝する意識があったと指摘する。⁽¹⁴⁾季節の対のみならず出発と帰還との時間的な対にもなっていることは『全注』や『釋注』の指摘の通りである。諸注釈の指摘を踏まえると、季節表現に挟まれた箇所にも内容のまとまりが見出せ、ここに虫麻呂が想定した宇合の職務が表される。

i 出立を目前にした作歌の現在

白雲の 竜田の山の 露霜に 色付く時に うち越えて 旅行く君は

ii 節度使宇合の職務

五百重山 い行きさくみ 賊守る 筑紫に至り 山のそき 野のそき見よと 伴の部を 班ち遣はし 山彦の 応へむ極み たに
ぐくの さ渡る極み 国状を 見たまひて

iii 帰還を予想した将来の春

冬ごもり 春さり行かば 飛ぶ鳥の 早く来まさね 竜田道の 岡辺の道に 丹つつじの にははむ時の 桜花 咲きなむ時に
やまたづの 迎へ参る出む 君が来まさば

i は出立を目前にした作歌の現在、ii では節度使宇合の職務を虫麻呂が想像して歌う箇所となる。iii は帰還を予想した将来の春を歌い、「早く来まさね」「丹つつじの にははむ時」「桜花 咲きなむ時」「やまたづの 迎へ参る出む」と未然形接続の助動詞「む」を伴って表されることから、出発の現在の景と帰還の未来の景が対比的に現れる。第二節で確認した『続日本紀』天平四年八月二十二日条には節度使の具体的な職務が記載されたが、ii の詞章では山野の果てまでも視察する様子が表れ、職務の実情を反映したものは疑わしいが、虫麻呂が他文献の詞章を踏まえ宇合の職務遂行の様を歌うことには注目される。⁽¹⁵⁾

「賊守る 筑紫に至り」は景行紀の日本武尊の熊襲征伐が想起される。天皇の度重なる平定にも関わらず熊襲は服従しないため、日本武尊が平定に派遣される。日本武尊が天皇に代わって九州国土の平定に京から出向く様は天皇の權威を借りて本来天皇の行うべき職務を代行していることから宇合の派遣に重ねることが出来るだろう。また「国状を 見たまひて」は、『風土記』や『日本書紀』にも類似の詞章が確認できる。⁽¹⁶⁾

①鏡坂。郡の西に在り。昔者、纏向の日代の宮に御宇しし大足彦の天皇、この坂の上に上り、国形を御覽して、すなはち勅曰りたまひしく、「この国の地形は、鏡の面に似たる哉」とのりたまひき。因りて鏡坂と曰ふ。斯れその縁なり。

〔豊後国風土記〕、日田の郡

②大立の丘と称ふ所以は、品太の天皇、この丘に立たして、地形を見したまひき。故れ、大立の丘と号く。

〔播磨国風土記〕、饒磨の郡

③三十有一年の夏四月の乙酉の朔に、皇輿巡幸す。因りて腋上の嶽間丘に登りまして、国状を廻望みて曰はく、「妍哉、国獲つること。妍哉、此には軼奈珥夜と云ふ。内木綿の真込国と雖も、猶し蜻蛉の臀帖せるが如もあるかも」とのたまふ。是に由りて、始めて秋津洲の号有り。

〔日本書紀〕卷三、神武天皇

天皇が各地を巡行し土地や国の名づけを行う際に「国形（地形）を見る」「国状を廻望む」と現れる。奥村和美氏による、基本的に天皇やそれに準ずる者が行う国の形状や情勢の視察を宇合の職務として歌い、また「宇合の行為に「見したまふ」が用い」られることも加わり、「天皇の委任を受けた宇合はあたかも天皇か天皇に準じる者のように歌われている」という指摘は肯うべきものであり、宇合は公務のために派遣される事実を踏まえれば、筑紫の視察は天皇の役割を代行するものとして意識的に取り込まれたと考えられよう。支配すべき特定の土地に赴き、その場所を平定することが古来天皇の政の一つとして行われるものであり、天皇の居所が次第に定着するようになってから天皇は臣下の者に遠方へ向かわせ、その土地を視察させ、中央の組織下に組み込ませる。こうした天皇を中心とした政治体制は土地という空間的支配に留まらず、時間概念も天皇の手中に置かれるものとして理解される。

新井栄蔵氏は古代日本の季節観を検討する上で、「ハルタツ」は「立春」の漢語的発想を有し、「立春」の季節観を支えるものとして、古代中国における四時観に言及する。「四時」は「原理的な理念では天帝の、政の責務では天子の、政の実務では四時の官すなわち人（臣）の建て定めるものであった」という^{①②}。天皇の政には国土平定のほか、四時を建て暦を定め、四時を順行させることも重要な政業の一つであった。虫麻呂は宇合の職務内容に他文献に見える詞章を取り込み、天皇の代行者として派遣される宇合の姿を描き出す。天皇の政

業は土地の平定に限られない。四時の順行は天皇の政が滞りなく行われることを意味し、出発の時点で宇合の任務完遂を予祝する構図を描き出すものと捉えられる。ために季節表現と宇合の職務内容とを同時に歌いあげるのであり、時間経過的連続性によって並べられたこと以上の意味を持つのである。

虫麻呂が冒頭に配した季節表現は諸注釈によって秋と指摘されるが、明確に表される春に対してやや曖昧な表現がとられる。改めて冒頭の季節を確認する。武智雅一氏は「露霜は二物でありながらひとつの慣用的歌語として用ゐられ」とし、露と霜とどちらを主とするかによって後続する詞章の表し方が変わることを明らかにした。^⑩集中での「露霜」の用例を見れば、

⑧ 妻隠る 矢野の神山 露霜に にほひそめたり 散らまく惜しも

(10—二一七八) 人麻呂歌集

⑨ 露霜の 寒き夕の 秋風に もみちにけりも 妻梨の木は

(10—二一八九)

⑩ 秋萩の 枝もとををに 露霜置き 寒くも時は なりにけるかも

(10—二二七〇)

⑪ 色付かふ 秋の露霜 な降りそね 妹が手本を まかぬ今夜は

(10—二二五三)

⑧⑨に「露霜」が木々を色づかせる契機として表される。露霜二つの作用として紅葉を引き起こすものとされ、区別はなされない。「露霜」は⑩萩の盛りの過ぎる頃に表れる現象で葉を色づかせ散らすもので、自然暦では秋晩から初冬において現れる現象であろうが、冬ではなく秋のものとしての認識が先行することが⑪に表れる。実際の状況に関わらず秋を表象する点で歌語化されており、露と霜との二物を指す「慣用的歌語」とする武智氏の説に首肯される。この起句は左注から秋八月に節度使の任命があったことから、景の連想として持ち出された語であると考えられ、送別における「現在」の時間を歌い込んだものとなる。

当該歌は秋春の順であるものの晩秋から初冬の出立の時期に加え、帰還を予想した春の景を取り合わせていることがわかる。こうして複数の季節を一首の内に歌い込むものは少なくない。掲げられる季節の順番によって抄出し分類する。

I 春を始発とするもの

⑫ やすみしし わご大君の高知らす 吉野の宮は たたなづく 青垣隠り 川並の 清き河内そ 春へには 花咲きををり 秋へには 霧立ち渡る… (6—九二三) 山部赤人

⑬ 山背の 久邇の都は 春されば 花咲きををり 秋されば もみち葉にほひ 帯ばせる 泉の川の 上つ瀬に 打橋渡し 淀瀬には 浮き橋渡し あり通ひ 仕え奉らむ 万代までに (17—三九〇七) 右馬頭境部宿禰老麻呂

II 春を始発としないもの

⑭ …山背の 鹿脊山の際に 宮柱 太敷きまつり 高知らす 布当の宮は 川近み 瀬の音ぞ清き 山近み 鳥が音とよむ 秋されば 山もとどろに さ雄鹿は 妻呼びとよめ 春されば 岡辺もしじに 巖には 花咲きををり… (6—一〇五〇)

⑮ 藤波は 咲きて散りにき 卯の花は 今ぞ盛りと あしひきの 山にも野にも ほととぎす 鳴きしとよめば…(中略)…秋さらば 黄葉の時に 春さらば 花の盛りに かもかくも 君がまにまと かくしこそ 見も明らめめ 絶ゆる日あらめや (17—三九九三) 大伴池主

III 歌中での選択の結果を表わしたもの

⑯ 冬ごもり 春さり来れば 鳴かざりし 鳥も来鳴きぬ 咲かざりし 花も咲けれど 山をしみ 入りても取らず 草深み 取りても見ず 秋山の 木の葉を見ては 黄葉をば 取りてそしのふ 青きをば 置きてそ嘆く そこし恨めし 秋山そ我は (1—一六) 額田王

I ⑫は作歌状況が述べられないが、吉野の宮を土地を褒めることによって讃美する。⑬は「三香の原の新都を讃むる歌」であり春秋の景は変わらないこと、末永くここに仕えようと歌われる。春と秋とを対にしている場合は、春を最初に据える例が大部分であり。IIはやや特殊な例となる。清水克彦氏は秋を最初に据える⑭を「古来の対句表現の型よりも、むしろ作者自身の現に立っている時や所に即した、その意味で特殊な、個的な表現の方が重要視される傾向が生じた」ものと捉える。⁽²⁰⁾『続日本紀』天平十三年十一月二十一日条に「大

養徳恭仁大宮」と名称が宣言されたことを踏まえれば、新都の完成に近い季節が作歌時期だと想定できる。^⑮は布勢の水海に遊覧する時の歌である。左注「四月二六日追和す」より作歌時期は夏である。藤波、卯の花は夏を代表する植物であり、次いで季節は秋、春と続く。新京への讚美と遊覧の感慨を述べるものとで歌の目的を異にするが、これらは作歌時期を起点として季節を配置したものと見られる。^{Ⅲ⑯}は春秋競憐歌である。配列としては春から秋へ進行するように見えるが、歌い手の選択の結果が表れたもので、他の春秋の対とは性質が異なるものとなる。

当該歌はⅡのように作歌の時点を開始に歌いあげたものと思われるが、秋春だけではなく、春に關する冬も季節を表すものと捉えるのが渡部修氏の論である。「冬ごもり春」という表現は、冬から春への季節推移の発想によって成り立つ表現で、「冬ごもり」を冠することで「春」を導き出す役割に加え、「それ一語で竜田路の冬の景を表現する役割を担い、また竜田路の冬から春への季節推移を現出させるべく選択された一語」であると捉えている。^⑰これを踏まえると当該歌は秋冬春と三つの季節をその進行順に並べて時間の経過を表したものとなる。

当該歌は、出立の秋に始まり、冬を経て、帰還の春の三季を歌い込む。古代中国において季節を建て定めることは天帝の政の重要事で、やがて季節を順行させることが政の成功を表す。滞りない四季の順行を出発の時点で歌うことで天皇が順調に政を進められることが示され、ゆえに政務を負って派遣される宇合は、無事春に帰還することができると歌われるのである。加えて虫麻呂は宇合の職務を想像によって描き出し、宇合は天皇に代行して政務を行う者と目した。ここに大業を成し遂げて帰還するだろう宇合を称賛することで、献ぜられる歌は予祝として機能し得る。

五、「さり行く」の語義

宇合帰還の春の景観は歌中最も句を割いて表されるが、季節そのものの様相は出発の時期が「露霜の色づく時」であるのに対し、帰還の時期は季節名詞に動詞を連ねた形式により「春さり行かば」と表される。この表現は当該歌の他、同巻六に所収の授刀寮散禁歌に

現れ、集中に二例を数えるのみである。「春されば」「春さらば」の活用の別はあるものの春の到来を表す表現の大半が定型のように表れることを踏まえれば、「行く」を付加したことには意味があるだろう。

まず諸注釈の「さり行く」の語の解釈を確認する。⁽²²⁾『古義』は「春になりなばと云むが如し」井上『新考』は「春ガ來ラバ」と注する。どちらも冬から春への転換、春の到来の意に解している。『全釈』は「春ニナツテ行ツタナラバ」と、冬から春へのゆるやかな推移の意を見出す。『全註釋』は『全釈』の解釈に近く、「さり行く」も「来る」こと同義としながら、「春になり行かば」と解する。窪田『評釋』でも「行く」と「来る」とを同義とし、「さる」に季節の推移の意を見出し「春が来たならば」と春の到来の意と捉えるものの、「行く」と「来る」の動詞の語義の差異に拘ることなく「当時の語法」として結んでいる。先の季節との連続を意識しつつも来たる春への緩やかな推移によって春の到来と解釈することで諸注概ね一致している。「春さり行く」は続く歌詞に桜やつつじの咲く竜田道の光景が現れることから、春の到来を表さないわけではない。しかし「行く」「来る」は動作としてはどちらも移動を表す点で共通しているが、移動の始発を示すのか、到達に重点を置いて示すのかの差異があるだろう。ゆえに付加される動詞を同一視することには慎重になるべきである。

「さり行く」の「さる」の語義は先に窪田『評釋』が季節推移の意として捉えていることに触れたが、徳田浄氏の説がほぼ通説とされている。徳田氏は「さる」の中心的な意義は移動進行にあるものとする。「さる」によって提示される季節の前の時間にある時に提示される季節への進行を表わすものと捉えている。⁽²³⁾「さる」が多く「来る」や「至る」と意識されるのは歌い手の視点の介在による。時間の移動進行は直線的不可逆的に流れるもので進行するばかりであるが、歌い手が介在すれば歌い手のもとに特定の時間が到達し、「来る」「至る」あるいは「その季節になる」と解され、歌い手のもとを離れて行けば「過ぎる」の意に解されるのである。これを踏まえつつ、次に複合化された動詞「行く」の意義を考える。

集中に複合動詞として用いられる「行く」の用例を確認すると、以下のように大別できる。

(1)空間の移動

①7 古に 恋ふる鳥かも ゆづるはの 御井の上より 鳴き渡り行く

(2—111) 弓削皇子

①8 真土山 夕越え行きて 廬前の 角太河原に ひとりかも寝む

(3—129) 春日藏首老

①9 越の海の 角鹿の浜ゆ 大船に 真梶貫き下ろし いさなとり 海路に出でて あへきつつ 我が漕ぎ行けば…

(3—136) 笠朝臣金村

(2)時の進行

②0 住吉の 遠里小野の ま榛もち 摺れる衣の 盛り過ぎ行く

(7—115) 六

②1 妻恋に 鹿鳴く山辺の 秋萩は 露霜寒み 盛り過ぎ行く

(8—160) 石川朝臣広成

②2 秋萩の 散り過ぎ行かば さ雄鹿は わび鳴きせむな 見ずはともしみ

(10—125) 二

②3 秋萩の 下葉の黄葉 花に継ぎ 時過ぎ行かば 後恋ひむかも

(10—120) 九

②4 もみち葉は 今はうつろふ 我妹子が 待たむと言ひし 時の経行けば

(15—137) 三 遣新羅使人等

(1) ①7は鳥の飛び行く様、①8は旅の道行を表わす。①9は海に乗り出して漕いでいくことを歌い、複合動詞化される「行く」は人や動物など一般の空間的な移動を表わすものとわかる。これらはいずれも歌い手の眼前、歌われるにあたって特定された場所からの移動を言うものであり、移動の瞬間のみではなく眼前で動作が起こってから移り去ってゆく様子を表した、やや時間幅のある語と解される。よって①は背後に時間の経過も内包しつつ、移動を表わすものとまとめられる。

(2) では一定の時期が経過していく場合に用いられる動詞の例が主となる。②0②1「盛り過ぎ行く」は最も良い、適した時期が移ろうこと、②2は、秋萩が散りさ雄鹿が鳴くという秋の深まっていく様を表され、盛り過ぎ行くに類した表現として時の進行を表す。②3②4は「時過ぎ行く」「時経行く」と、時の進行の様相が語句に顕著現れる。②3は下葉の紅葉が花の開花に次いで起こることを段階的に表し、②4は葉が移ろうのを見て我妹子と約束していたはずの時間が過ぎたことに気づく歌である。「過ぎる」「経る」に留まらず、「行く」が付

加されることで、時間の進行方向が明らかになりより経過の意味合いが強く表れる。(2)には空間の移動こそ表れないが「盛り過ぎ行く」のようにある一時点を中心としつつ、その先を含めた時間の進行が表される。「行く」で空間の移動がない場合、主に時間が経過する意を表わすことになるが、「行く」の要素を含むことで不可逆的な時間の進行、現在眼前にある状態から物質の変化に伴う時の経過の意が表れる。これは歌い手の体感する時間と不可分な表現であり、特定の時期を過ぎての後までを含む経過的な意味が備えられていると考えられる。

『全註釈』や『評釈』が「さり行く」が「来る」と同義と述べていたが、同義であるならばわざわざ別の表現を用いる必要はなく、定型として同じ表現を使ってもよいはずである。それにも関わらず、「春の来たらば」などとは言わず、「さり行かば」とするのはやはり「来る」とは別の意義を有するためであろう。複合動詞「来る」は以下三つに大別できる。

(一)空間の移動

②5 筑波嶺を 外のみ見つつ ありかねて 雪消の道を なづみ来るかも

(3—三八三) 丹比真人国人

②6 伊勢の海ゆ 鳴き来る鶴の 音どろも 君が聞こさば 我恋ひめやも

(11—二八〇五)

(二)事態の始発・進行

②7 夕さらば 潮満ち来なむ 住吉の 浅香の浦に 玉藻刈りてな

(2—一二二) 弓削皇子

②8 苦しくも 降り来る雨か 三輪の崎 狭野の渡りに 家もあらなくに

(3—二六五) 長忌寸奥麻呂

(三)時の継続

②9 玉梓の 道に出で立ち 別れ来し 日より思ふに 忘る時なし

(12—三三三九)

③0 …人はしも 満ちてあれども 君はしも 多くいませど 行き向かふ 年の緒長く 仕へ来し 君の御門を 天のごと 仰ぎて

見つつ 恐けど 思ひ頼みて…

(13—三三二四)

(一)②⑤では難渋しながらやって来る、②⑥鶴が鳴きながら飛んで来ることなど移動して特定の場所あるいは歌い手が知覚できる範囲に到達することを表わす。(二)②⑦は潮が満ちてくる、②⑧雨が降ってくるなど事態の始発や状態の進行が現れ、(三)②⑨は別れて来た日を起点として今もなお忘れることがない、あるいは③⑩に長年仕えてきたという、時や状態の継続が表れる。「行く」が時間の経過を表すのに対して、(三)の「―来る」は現在までの時の継続が表されるものであって、歌い手の現在の時を中心として、現在に到達するのが「―来る」、現在から将来に向かうのが「―行く」で表されるのであり、両語は反対の時間の進行方向を表すものとなる。

「行く」が付加されることで経過的な時間の様相が顕著に表れるのが授刀寮散禁歌である。

ま葛延ふ 春日の山は うちなびく 春さり行くと 山峡に 霞たなびき 高円に うぐひす鳴きぬ もののふの 八十伴の男は
雁がねの 来繼ぐこのころ かく繼ぎて 常にありせば 友並めて 遊ばむものを 馬並めて 行かまし里を 待ちかてに 我が
せし春を かけまくも あやに恐く 言はまくも ゆゆしくあらむと あらかじめ かねて知りせば 千鳥鳴く その佐保川に
岩に生ふる 菅の根取りて しのお草 祓へてましを 行く水に みそぎてましを 大君の 命恐み ももしきの 大宮人の 玉
杵の 道にも出でず 恋ふるこのころ
(6—九四八)

集中の「さり行く」はいずれも「春」に続く。先に複合動詞「―行く」「―来る」の表す時間経過の方向を確認したが、授刀寮散禁歌では並べられる景物からも「―行く」が時間の進行を表すものと判断できる。「ま葛延ふ 春日の山は うちなびく 春さり行くと」に続き、多く春の到来の時期と取り合わされる霞に始まり、うぐいすが鳴き、晩春に雁が帰る頃というように、春が次第に深まってくる様相が看取され、ここに時の経過を見出すことができる。つまり春になってその状態が進行していったことを表わすのが「春さり行く」となのである。ここでは春到来の一時点を表わすに留まらず、そこから経験的に知り得て容易に想像できるほぼ確定的な春の時間を予想した春の景を表し、「春さり行く」は、先々の時間を含蓄する動詞として機能していると捉えられる。

以上から、当該歌の「春さり行かば」は「さる」は時間の移動進行の意を中心として「行く」を付加し時間の経過を表わすため、「さ

り行く」となると、「露霜の色づく時」の歌い手の現在から、帰還を予想した「春」までを連続した一続きの時間として捉えられ、出立の時点で春の景に囲まれて任務を完遂して帰還することを保証する表現であると考えられる。「さり行く」が表すのは、季節の循環の中、毎年現れる季節の到来と、歌い手の現在からその先の光景までも照射する、当然あるべき未来の光景なのである。

むすびに

当該歌は宇合の西海道節度使に派遣される時に披露された高橋虫麻呂作歌である。宇合の実際の出發の時期は『続日本紀』に明らかで、冒頭の「露霜の色づく時」という時期設定はおおよそ事実に基づいて据えられている。対する帰還の時期は、節度使が臨時の官職であるため判然としない。虫麻呂は定かでない帰還の時期を春に据え、一年経たずに任を終えて帰還すると歌う。公務の官人を送る歌の類型として早期の帰還が第一の願いとなることは自明であるが、帰還の時期が不明であれば他の送別歌のように特定の時期を歌わない方法もある。それにも関わらず虫麻呂が春に宇合の帰還を据えたのは、虫麻呂の作意である。

歌中の春の描写は、「桜」「つつじ」と特定の植物が「咲きにほふ」様に表れる。これは先行する問答歌の盛りを迎えた「娘子」に冠するものである。春は女の盛りの時期であり、それを過ぎれば老い衰えてしまい、同時に夫の愛情を失うことが懸念される。閨怨詩に類似の発想を見ることができ、春になれば「迎へ参ぬ出む」と歌うのは、容色が衰えぬうちに再会を切望する心情を想起させる。待つ女の姿を仄めかすことで、待つ側の虫麻呂の存在が一举に立ち現れて来る。待つ側の孤独は悲嘆に収束せず、竜田道上上官宇合を奉迎する虫麻呂自身の姿に転換し、帰還の春の光景を際立たせる。

冒頭の晩秋から冬、春と連続して複数表れる季節表現は、古代中国において帝が季節を建て定めることが政の重要事とされ、やがて季節の順行が政の成功を表すものとされる発想に重ねられる。ここに宇合の善ない任務遂行を願う意図が見出せる。歌われる節度使としての宇合は、天皇の権威を負って派遣された、いわば天皇の代行者たる存在として描かれ、勇猛な軍士たる宇合への讃美となろう。末尾の「春さり行かば」に表される帰還の様相は、待つ側である虫麻呂と旅立つ宇合との時間の継続を強調するものともなり得、宇合

出立から帰還、虫麻呂の奉迎までの一連の時間が顕在化するのである。

こうして当該歌は字合を称賛し壮行することを目的としながら、送別歌としては類を見ない季節表現を取り入れ、待つ側虫麻呂と旅立つ字合との紐帯を表すものと捉えられよう。

注

(1) 『万葉集』の引用は小島憲之・木下正俊・東野治之校注・訳『萬葉集①』④(新編日本古典文学全集6)9、小学館、一九九四年九月～一九九六年八月)による。

(2) 金井清一氏は「公的な場で御製発表を伴う節度使送別の儀礼的行事があった」ことは西海道節度使送別の虫麻呂作歌に続き、天皇御製歌が並ぶという配列から想定しうるものとするが、集中には虫麻呂の歌のみが記載されることから、「公的な歌人として節度使を送別したのではなく、私的な関係において字合を送別した」と作歌の場を推定している。(高橋虫麻呂と藤原字合)『国文学解釈と教材の研究』第二三巻第五号)

(3) 「丁亥、従四位上多治比真人広成を遣唐大使とし、従五位下中富朝臣名代を副使とす。」(『続日本紀』天平四年八月十七日条)とある。『続日本紀』の引用は青木和夫・稲岡耕二・笹山晴生・白藤禮幸校注『続日本紀一』二二(新日本古典文学大系12)13、岩波書店、一九八九年三月～一九九〇年九月)による。

(4) 天平五年の入唐使に贈る歌は他に「天平五年癸酉、遣唐使の船難波を發ちて海に入る時に、親母の子に贈る歌一首并せて短歌」(9―1790、1791)、「天平五年、入唐使に贈る歌并せて短歌 作主未詳なり」(19―14245)などがある。齋戒して旅立つ者の安全無事を祈る内容が共通して表れるものの、いずれも季節に関連する表現は見えない。

(5) 当該歌のように送別に際して歌われる、残される側からの歌は、公務を負って旅に出る夫を家にいる妻が案じる形で集中に散見される。独り旅行く夫の辛さが助動詞「らむ」を用いて表されるという類型を有すると並木宏衛「万葉集卷一伊勢行幸時歌群―行幸時歌について―」(『野州国文学』第二二巻、一九七八年十月)、上野理「留京三首―留守歌の系譜と流離の歌枕―」(『人麻呂の作歌活動』汲古書院、二〇〇〇年三月)らに指摘される。これら「留

守歌」の多くは、女性仮託により孤独感、断絶感が表される（高松寿夫「初期万葉の生成と羈旅―〈留守歌〉の発生・展開・消滅―」（『上代和歌史の研究』新典社、二〇〇七年三月、初出：『上代文学』第七二号、一九九四年三月）。この点では当該歌が待つ女の歌の詞章を取り込むことで、不完全ながらも一部の女性仮託を行って宇合の帰還を待ちわびる姿勢が表れるとも言え留守歌の類型に近いものとも思われるが、題詞より当該歌の主眼は宇合の壮行にあり、惜別の念や孤独、断絶感を表面化させる意図は見出しがたく、留守歌とは区別しておきたい。なお佐々木信綱編『分類万葉集』（岩波書店、一九三〇年九月）では当該歌や続く天皇御製歌（6―九七三―九七四）、入唐使に贈る歌（1―六二、8―一四五三―一四五五）を「送別」と分類し、それとは別に「留守」の項目を立てており、両者を区分している。

(6) 大原良通「唐の節度使と日本の遣唐使」（『史泉』第七七号、一九九三年三月）

(7) 節度使の行路について、大森亮尚「西海道節度使の旅―萬葉集六二・六二二歌にそって―」（『山手国文論攷』9、一九八八年三月）は、西海道行きは『続日本紀』天平四年八月二二日条に多量の物資を載積可能な船の建造の発注があり、これを用いたものとする。一行の旅は「難波の湊から瀬戸内海を西下する水行」とし、船の準備期間に八か月を要し、天平五年閏三月二五日前後に出発、天平五年十二月末に帰還したものと推測する。また『延喜式』巻第二四 主計寮上では都から大宰府までは上り約一か月、下り二週間、海路では一か月、大宰府から先の大隅・薩摩国までは更に上り十二日、下り六日費やすため（虎尾俊哉編『訳注日本史料延喜式』下、集英社、二〇一七年十二月）、容易に往還し難いことは承知されていただろう。

(8) 西地貴子「高橋虫麻呂の辺塞歌」（『福岡女学院大学紀要（人文学部編）』第十五卷、二〇〇五年二月）

(9) 『古事記』の引用は、山口佳紀、神野志隆光校注・訳『古事記』（新編日本古典文学全集1、小学館、一九九七年六月）による。

(10) 小島憲之「伝説歌の表現」（『上代日本と中国文学―出典論を中心とする比較文学的考察―』第八章第三節（塙書房、一九八六年一月、初版一九六四年）

(11) 『玉台新詠』の引用は（陳）徐陵編・（清）吳兆宜注・（清）程琰刪補・穆克宏點校『玉臺新詠箋注』上冊、下冊（中國古典文學基本叢書、中華書局、一九八五年六月）による。

(12) 武田祐吉『増訂 萬葉集全註釋六』巻の六・七（角川書店、一九五六年十二月）

(13) 吉井巖『萬葉集全注六』（有斐閣、一九八四年、九月）

(14) 伊藤博『萬葉集釋注三』（集英社、一九九六年五月）

- (15) 中西進氏は「山彦の 応へむ極み 谷暮の さ渡る極み」が祝詞や『高橋氏文』に見え、集中では憶良が使用している詞章であること、「山たづの 迎へ参出む」が巻二冒頭や『古事記』に磐姫の歌として見えることから、「旅立つ字合におくる言ほぎの歌である」と指摘する（『風景の幻想』『中西進著作集』第二十七卷、四季社、二〇一〇年五月（初出：『旅に棲む 高橋虫麻呂論』角川書店、一九八五年四月））。
- (16) 『風土記』、『日本書紀』の引用は以下による。植垣節也校注・訳『風土記』（新編日本古典文学全集 5、小学館、一九九七年十月）、小島憲之・直木孝次郎・西宮一民・蔵中進・毛利正守校注・訳『日本書紀①』（新編日本古典文学全集 2、小学館、一九九四年三月）
- (17) 奥村和美「龍田の曲」（『国語と国文学』第八七卷第十一号、二〇一〇年十一月）。また小田芳寿氏は「五百重山 い行きさくみく国形を 見たまひて」までを「西海道節度使の任務の具体に基づいた誇張表現を用いて、赴任先の職務内容を積極的に歌い、字合への称賛を表すと捉える（『天平四年西海道節度使を見送る歌』（『萬葉』第二一六号、二〇一三年十一月））。
- (18) 新井栄蔵「万葉集季節観攷―漢語〈立春〉と和語〈ハルタツ〉―」（『万葉集研究』第五集、塙書房、一九七六年七月）
- (19) 武智雅一「露霜攷」（『萬葉』第七号、一九五三年四月）
- (20) 清水克彦「福麻呂の宫廷儀礼歌」（『萬葉論集』第二、桜楓社、一九八〇年五月）
- (21) 渡部修「冬ごもり春」から「うちなびく春」へ―万葉びとの季節観の展開・春の場合―」（『國學院雑誌』第九四卷第三号、一九九三年三月）
- (22) 諸注釈における「さり行く」の解釈
- ・ 鹿持雅澄『万葉集古義』六卷之上（『萬葉集古義（三）』精文館、一九三七年三月）
 - ・ 井上通泰『萬葉集新考 第二』卷六（国民図書株式会社発行、一九二八年四月）
 - ・ 鴻巣盛廣『万葉集全釈』第二冊上卷（廣文堂、一九五五年二月）
 - ・ 武田祐吉『萬葉集全註釋』六卷の六・七（角川書店、一九五六年十二月）
 - ・ 窪田空穂『萬葉集評釋』第四卷（東京堂出版、一九八四年十一月）
- (23) 徳田浄「夕されば考」（佐々木信綱編『萬葉學論纂』明治書院、一九三一年三月、初出：『國學院雑誌』第三一巻九号、一九二五年九月）